

# 古代朝鮮語についての若干の覚え書き

福井 玲

東京大学

キーワード：古代朝鮮語、中期朝鮮語、郷歌、朝鮮漢字音

## 1 はじめに

本研究会は日本語の系統論がテーマであることから、筆者に期待された役割は、このテーマとの関係において、古代の朝鮮語、ならびに古代に朝鮮半島で話されていたであろう諸言語について論じることであるが、残念ながら筆者ははまだ日本語と朝鮮語との比較言語学的研究には懐疑的である。本研究会において行われた発表においても、日本語と朝鮮語の比較に関して、部分的には印象的な資料の提示もあるが、全体としては、まだまだこれからの課題が多く残されているのではないかというのが筆者の受けた率直な印象であった。<sup>1</sup>

日本語の場合も同様であるが、朝鮮語の場合も、現在行いうるもっとも確実な研究は、文献上の記録や内的再構、諸方言間の比較など歴史言語学のあらゆる方法を用いて、朝鮮語の内部において、できるだけその祖形を求め、祖語 (Proto-Korean) に近づいていくことにあると思われる<sup>2</sup>。以下では、こうした立場から、古代朝鮮語について若干の私見を述べてみたい。なお、朝鮮語を専門とされない方にも理解していただくため、よく知られた事実や既存の説の紹介に過ぎない部分も多いことをお断りしておく。

## 2 三国時代の言語状況

古代の朝鮮半島においてどのような言語が話されていたかについては、確実なことは知り難いが、それでも諸先学の研究により、次のような点は明らかにされており、筆者

---

<sup>1</sup>とは言うものの、1年間にわたった本研究会は大変興味深いもので、さまざまな点で啓発され、また、それまで知らなかった研究に接することができた点で、たいへん有意義であった。主催された Vovin 先生ならびに招待して下さった長田俊樹氏に感謝申し上げる。

<sup>2</sup>このような意味で、Ramsey (1986, 1991, 1997) などの一連の研究は、内的再構に基づくきわめて優れた研究である。なお、朝鮮語の音韻史に関して、中期朝鮮語から古代語へとさかのぼって行く研究については、福井玲 (2003) で概観した。

も基本的には、あるいは考察の出発点としては、こうした立場に立つ。

- (1) 現在の朝鮮語、さらにもう少しさかのぼって、15～16世紀頃の中期朝鮮語の直接の祖先は新羅の言語である。
- (2) 百済の言語は、王族の言語と民衆の言語が異なり、「二重言語」であった。このうち、民衆の言語は韓族の言語に近いものであった (cf. 河野六郎 (1987)、李基文 (1998))。
- (3) 高句麗の言語については、直接の記録がほとんどないが、『三国史記』地理志の地名解釈により、韓族の言語とはかなり異なる面をもっていたらしいことがわかっている。ただし、これらの地名に反映された言語が高句麗語であったかどうかについては意見が分かれている。

なお、(1)は、実際には話を少し単純化して述べたものであって、例えば、現代のあらゆる方言が、新羅の言語に直接さかのぼるとは限らない。また、Vovin (1995:232-233)は、「郷歌」によって知られる新羅の言語は、独自の変化をとげた一方言であって、現代の慶尚道や中央方言の直接の祖先ではない、としているが、これはその根拠としてあげられている点については、必ずしも同意できないものの、この考え方自体は有意義なものと思われる。つまり、現代の方言であるか、文献上の過去の言語であるかを問わず、変化の段階という点では相対化して考える必要がある、ということである。ただし、(1)のような表現がしばしばなされるのは、主に高句麗や百済の言語に対してであって、新羅の言語がそれらよりも、後の朝鮮語とより密接な関係にあるという点は認められると考える。

(3)については、例えば、『三国史記』地理志の地名解釈から導き出される語形のうちで、いくつかの数詞のように日本語と似たものが見られる点が注目されてきた。また、単に似ているというだけでなく、微妙な相違点もあり、それらが音韻体系の相違を表わしている点で、単なる表面的な類似よりも一層注目されるものである。筆者もこれらの資料は日本語の系統を考える上ではもっとも貴重なものと考えているが、これらは朝鮮語と直接結び付けられるものではなく、本稿ではこれ以上はふれない。

なお、(3)に述べた「意見が分かれている」というのは、例えば、李基文 (1995, 1998) はこれらが高句麗語であることを積極的に認めているのに対し、河野六郎 (1993) は、濊語ではなかったかとする。これらの論点、また研究史については、李基文 (1995) を参照されたい。また、これら諸説については筆者も福井玲 (2000) で紹介と若干の私見を述べたことがある。

### 3 新羅語について

前節でも述べたように、現在の朝鮮語の直接の祖先は新羅の言語であると言われることが多い。それには、言語外的な理由、即ち新羅による三国統一とそれに続く高麗、朝鮮王朝の成立という歴史的な理由も考えられるが、言語学的に見た場合、その理由のもっとも大きなものは、新羅の「郷歌」から窺われる語形が中期朝鮮語と密接な関係をもつことである。例えば:

- (1) 心音 (MK mozom), 憂音 (MK silum), 夜音 (MK pam), 人音 (MK sarom),  
雲音 (MK kwurwum)<sup>3</sup>

これらの表記は、「音」という字を添え、その字音 (MK um) を利用して、末尾が m で終わる語であることを示しているが、いずれの場合も中期朝鮮語の該当する語とうまく合う。

ただし、残念なことは、上の例でも窺われるように体言にしても用言にしても語彙の意味を表わす部分は、ほとんど例外なく、釈読によって表記されていることで、そのため具体的な語形は知り難く<sup>4</sup>、上のようにわずかにその単語の末尾部分の音を知ることができる場合がある、というぐらいである。なお、語尾の部分に関しては、音読された場合も多く、文法的形態素についてはかなりの語形を具体的に知りうる。これについても、多くの場合、中期朝鮮語の延長線上で考えることができる。これらについては後で詳しくふれる。

これ以外の点で、後の朝鮮語が特に新羅語と密接に関係があると考えられる理由は、若干の語彙の地理的分布である。例えば、「城」を意味する語は、日本書紀の朝鮮半島関係の記事に「サシ」という語がしばしば見えるが、その他に、やはり日本書紀において特に百済関係の記事に見られる「キ」(\*k̄i) がある。「城」の字を書いて「キ」と読んだと思われる例は三国史記に見られる地名の中で、特に百済の領域に多く見える。ま

<sup>3</sup>本稿では朝鮮語の表記は Yale 式で行なう。中期朝鮮語にあてはめていえば、e = [ə], o = [ʌ], u = [i], wo = [o], wu = [u] であることに注意されたい。それ以外の言語についてはこの方式は適用されないことにも注意。また、中期語におけるアクセントの表示は必要な場合以外は省略する(ただし、ときどき: によって上声を表す)。なお、中期語の語形であることを示すのに語形の前に MK を付けておく。

<sup>4</sup>もっとも、実際にはこの原則があるおかげで、どれが語彙の意味を表わす要素で、どれが文法的意味を表わす形式であるかの境界が見分けやすくなっている。小倉進平(1929)と梁柱東(1965)による解説は、語幹部分を、ある場合は音読し、ある場合は釈読するというように無原則であったために混乱を招いている。金完鎮(1980)による解説のもっとも優れている点は、この原則を徹底させている点である。実際、日本の『万葉集』に見られる表記法が多様であるのに対して、郷歌の表記法はほぼ単一の原則で理解できる。

た、高句麗の領域では「忽」\*hol<sup>5</sup>のような語形が用いられたことが知られている。この3つの語形の中で、中期朝鮮語で見られる語形は「サシ」にあたる cas であって、他の2つは見られないことから、これら三国の中では特に新羅の言語が中期朝鮮語と関係が深かったことが推測される。

いずれにしても古代の朝鮮半島のさまざまな言語については資料が乏しく、確実なこととは言いがたいが、その中で唯一まとまった言語資料を提供してくれるのが新羅の郷歌である。

## 4 郷歌について

### 4.1 呼称と表記法

今日、普通「郷歌」と総称される歌謡は、『三国遺事』(1285年頃)に伝わる14首と『均如伝』(1075年)に伝わる「普賢十願歌」11首を合わせて25首、または、これらに『高麗史』に伝わる1首を合わせて26首残されているものをさす。

郷歌はまた「詞脳歌」ともよばれる。これは新羅の固有語で郷歌を意味するもので、『均如伝』には「詞脳 意精於詞故云腦也」との注が付けられている。「詞脳」は「思内」あるいは「詩惱」とも書かれる(『三国史記』雑誌第一「楽」の条に「思内 一作詩惱 樂」とある)。

歌の形式は、もっとも整ったものでは、全体で10句からなり、そのうち最後の2句は「後句」「落句」などとよばれ、感嘆詞(「阿耶」、「嘆曰」)などで始まる<sup>6</sup>。『均如伝』所載の11首は、すべてこの形式から成っているが、『三国遺事』に伝わる14首にはそうでないものも含まれる。なお、「詞脳歌」という言葉は、郷歌全体をさすものか、あるいはこの10句形式の歌をさすものかについては、考慮する余地があるが、『三国遺事』に「…始作兜率歌、有嗟辭詞脳格。…」とあることからすると、後者が正しいのかもしれない。一句の音節数は4~10程度で、必ずしも一定ではないように見えるが、これについては今後詳しい研究が必要である。『均如伝』附載の崔行歸序には「三句六名」という表現があり、これを金完鎮(1980:31)は一・三・七句が六音節からなる、と解釈している。

郷歌で使われる表記法のことを、今日韓国では「郷札」とよんでいるが、実際にはこ

<sup>5</sup>この「忽」によって表される語形を\*holとするのは、朝鮮漢字音に基づくものであり、はたしてこれが高句麗語として正しいか否かについては疑問がある。高句麗の漢字音が新羅の漢字音とは異なっていた可能性は多いにあり、かなり異なった形として再構しなければならぬ可能性の方が高いと考えるが、この点についてはまた別の機会に論じたい。

<sup>6</sup>日本の万葉集などの長歌に見られる反歌と同じようなものか。この点についても研究が必要である。

字 機能	推定形	由来	中期語
是 主格	i	訓	i
叱 属格(等)	s	不明	s
乙 对格	ul	音	(l(o/u))l
盼 对格	hul ??	音	(l(o/u))l
隱 主題	un	音	(n(o/u))n
焉 主題	on	音	(n)on
沙 強調	sa ?	音	za
尸 未実現連体形	l ??	不明	lq [l?]
遣 接続語尾(?)	kwo ??	不明	kwo ??
古 接続語尾, 疑問文語尾	kwo	音	kwo
音 名詞化	m	音	(o/u)m
音 持続態(金完鎮)	m	音	—
乎 いわゆる「意図法」	wo	音	wo/wu
賜 尊敬	si	音(+訓?)	(o/u)si
白 謙讓	solp ?	訓	zov
内 現在	no ?	音	no
理 未実現	li	音	li
去 (一種の) 過去	ke	音(+訓?)	ke
如 終止形語尾(等)	ta	訓	ta
只 (用言) 強調	k ?	音	k

表 1: 郷歌に用いられる主な文法的形態素を表わす字

の言葉は上述の崔行歸序に「郷札似梵書連布」とある一例のみであり、これは用語というよりはむしろ「固有語によって書いたもの」というような、この文脈における一表現に過ぎなかったと思われる。実際の表記法は吏読や口訣などと密接な繋がりがあり、郷歌・吏読・口訣といった名称の区別は書かれる内容の種別にかかわるものと考えの方が実際的なのではなかろうかと筆者は考えている。

## 4.2 文法的形態素

表 1 に郷歌の中で用いられる文法的意味を表わす形態素の代表的なものをあげた。これらは郷歌の中で音読されるものも多く、具体的な語形を与えてくれるという点で、中期語との比較をする上で重要な資料となるものである。また、音読されないものについては、訓にもとづく用法であることがはっきりしているものと、はたして音に基づくの

か訓に基づくのか不明のものもある。

これらのうちで、いまだに解明されていない部分が多いのは、推定される語形、そして、なぜその字がその形態素に用いられるかという由来に関する部分である。以下ではこれらについて、諸先学の研究をふまえながら、若干の私見を述べてみる。

#### 4.2.1 「叱」

由来は未詳。sの音を表わす。郷歌、吏読、口訣、固有名表記など幅広く用いられる。この字の本来の字音（広韻 昌栗切、MK cul）からはsを表すことが説明しがたい。そのため、例えば金完鎮(1985:5-6)は「時」の草書体に由来するとするが、この説も俄かには信じがたいものであり、今のところ不明とするほかない。

文法的形態素としては、属格のsを表わすのが代表的用法であるが、その他に自立語の語形の一部、特に、漢字音では表現できない音節末のsや、sk, st, spといった複子音に含まれるsを表わすのにも使われる。なお、特に（中期語における）複子音に該当する場合などがそうであるが、単にsを表わしたのではなく、母音を伴った\*siのような発音を表わした可能性も考えられる。また、例えば、新羅の王号で「尼師今」とも「尼叱今」とも書かれる場合、はたしてsであったのか、siであったのか速断はしがたい。しかし、「叱」が非常に幅広く用いられ、またその由来も不明なほどに慣用化していたということは、例えばsiを表記する場合のように、普通の漢字音表記ではできない音節末のsを表わすためだったと考える方が都合がよい。

#### 4.2.2 「乙」と「𠂔」

この2つは対格を表わすのに用いられる。細部を別にすれば中期語の-ulに該当することは間違いない。

この2つのうちで、問題となるのは𠂔の方である。この字は𠂔の俗字とされ、広韻では義乙切、許訖切（又許乙切）、中期語の漢字音ではhulまたはhilであり、いずれにしても頭子音は次清である曉母であって中国語の中古音ではhまたはxと推定される音である。Vovin (1995)はこれが\*yilという音形を表わしたとするが、この推定は筆者は疑問に思う。仮にこのような語形を表わそうにも適当な字がなかったということは考えられるが、あとでも述べるように、中期語で\*kが弱化した形で出てくるyは、この時代にはなかった可能性がある。また、中期語のyは出現する音韻的環境が極めて限られているのに対して、対格にyilを想定すると、yがほとんど無条件に現われうることになり、当時の音韻体系が非常に複雑なものになってしまうのではなからうか。<sup>7</sup>

<sup>7</sup>また、Vovin (1995)は、「乎」もyoとしているが、同様の議論により、これも疑問である。なお、この字は日本において上代に「を」を表わすための常用字であったことも併せて考えてみるべきであろう。

そこで、*hul*のような音を表わし、対格形に使われたとすると、一つの可能性としてもっともこれに相応しいのは、末尾に*h*をもつ形態素の対格表記ということになるが、残念ながら実際の郷歌の用例は次のように多様であって、Vovin (1995)も指摘するように、とてもこの可能性が典型であったとは言いがたい（個々の用例の検討はVovin 1995が詳しい。ここでは代表的な例のみあげる）。

- (2) a. 地<sup>8</sup> (「地を」 MK *stah-ul*)、一等<sup>8</sup> (「ひとつを」 \**hotonah-ul*<sup>8</sup>, MK *honah-ul*)
- b. 花<sup>8</sup> (「花を」 MK *kwoc-ul*)、目<sup>8</sup> (「目を」 MK *nwun-ul*)、際<sup>8</sup> (「際を」 MK :*koz-ol*)、等々。
- c. 此<sup>8</sup> (「これを」 MK *i-(lo)l*)、吾<sup>8</sup> (「私を」 MK :*na-(lo)l*)

a. は中期語において、語末に*h*を伴ったもの、b. はその他の子音を伴ったもの、c. は母音終りのものである。このようにほとんどあらゆる種類の名詞に用いられており、*hul*の字音から推定されるような、*h*の音を表わすためのものであったと見なすのは確かに困難である。

この困難を克服するためには、形態素末に*h*を持つ語がこの時代には中期語よりも多かったとする考え方がありうる。実際、中期語ではこの種の語は、末尾の*h*を除くと、母音か*l*で終るものが大部分で、それ以外には*n*, *m*で終る語がごくわずか存在する程度なので（例えば、*anh*「内」）、このような分布の偏りから言って、それ以前にはこのような語がもっと多かったと考えることは不可能ではない。また、中期語において、この種の語の*h*の現われは必ずしも固定しておらず、例えば、*hanolh*「天」の主格形は*hanolhi*とも*hanoli*とも表記されており、中期語における状態は変化の途上であったことを示している。

ただし、中期語では*h*の出現する環境は母音か鳴音 (sonorant) の直後に限られるのに対して、上の、郷歌の用例には、MK *kwoc-ul*「花を」、MK :*koz-ol*「際を」のように阻害音 (obstruents) が含まれるのは問題である<sup>9</sup>。

<sup>8</sup>数詞の「一」は、中期語では*honah*であった点と、鎌倉時代初期の日本の資料である『二中歴』などに「カタナ」という表記が見られる点、さらに郷歌の中に「一等」と表記されていることなどを総合的に勘案すると、\**hotonah*という祖形が再構できる。ただし、郷歌の「一等」がこの再構形と同じものであったかについては疑問の余地がある。なお、『二中歴』および類似の資料についての詳細は、辻星児 (2000) を参照。

<sup>9</sup>後者は中期語で上声をもつ語であり、かつては2音節語幹をもち、末尾子音に関しても中期語とは異なっていたと考えることはできる。なお、c. の MK :*na-l(ol)*「私を」の*na*もやはり中期語で上声であり、新羅語でも何らかのそれに対応する要素があったはずである。もっとも、このことと形態素末の*h*とは直接関係ないかもしれない。

なお、三国遺事所載の郷歌には主に「𠂔」が用いられ、均如伝所載の方には主に「乙」が用いられるというのは顕著な傾向であり、しばしば言われるように「𠂔」の方がより古い用法と考えられる。

また、「𠂔」は対格の他に、「慚𠂔伊賜等」\*pwuskulisyadon「恥かしがられるなら」のような例でも使われるが、これは kul にあたる字音をもつ適当な漢字がなかったためであろうか。

#### 4.2.3 「尸」

これも由来は未詳。金完鎮(1985:4-5)は「乙」の篆書体に由来するとする。鮎貝(1955)は「屨、履」などの省画ではないかとする。

この字は未実現連体形(MK -lq)として使われるのが典型である。(ここでqと表記したのは、声門閉鎖を表わす文字で書かれるか、または次にくる音節がいわゆる「各自並書」として表記されるものをさす。発音はいずれにしても濃音化可能なものは濃音になる。後続する要素が濃音化できない場合には単に-lと表記されることも多い。)

ところで、中期語において、-lqとして現われるこの形のqの部分の由来についてはまだ確実なことはわかっていない。おそらくは何かの子音の名残りではないかと思われるが、これに関連して次のような例をここで再考してみたい。

- (3) a. 流布 *hwodoy taols*      *epsi hwolila* (楞嚴經諺解 1-4b8)  
 流布するにも 尽きること なく するであろう  
 「流布無窮」

- b. *nwol'aylol nwooyya sulphuls*      *epsi pulunoni* (杜詩諺解 25-53a)  
 歌を 再び 悲しむこと なく 歌うのだが  
 「歌莫哀」

- c. *stahay pengulol hon ca twu ca hoya* (法華經諺解 2-118a)  
 地から 離れること 一 尺 二 尺 して

これらの例は、taols「尽きること」、sulphuls「悲しむこと」、pengulol「離れること」の部分に、通常の連体形ではなく、それ自体で名詞句を形成する働きをする-lが含まれている。これらのうち、最初の2つには-lの後にさらにsが続くが、最後の例には含まれない。これは、おそらく、後続する語が母音で始まるか、子音で始まるかにかかわっているようであるが、ここで問題となるのは、最初の2例に含まれるsの正体である。これについて、次の3つの可能性を検討してみよう。

- (4) a. -l + so (依存名詞「こと」)「～する+こと」  
 b. -l + s (属格)「～すること+の」

## c. -ls (lsで一形態素)「～すること」化石化した表現?

a. は、中期語の述語形成にしばしば見られる次のような例と同様ではないかとする解釈である。例えば -lssila (< -lq+so+ila) 「～することである」、のような表現によく使われる。しかしこのような場合には -lq の通例に従って、so の頭子音が濃音化された形で現われるとともに、その後に述語や句を形成する要素が続くものであり、これらが s を残してすべて消失するとは考えにくい。したがって、この可能性は低いと考えられる。

b. は、それ自身で名詞句を形成する -l のあとに属格の s が後続したものとする解釈である。また、現代語とは異なり、中期語では従属節の主語を表わすのに属格が使われることがあるので、この可能性はありうる。

c. は少なくとも共時的には -ls は不可分の要素であったとする見方で、通常は -lq として現われるこの形が、化石化した形で残ったものとするものである。ということは、-lq として現われる形の q に当たる部分がももとは s であった、すなわち、-lq の祖形が \*-ls であった、ということになる。

以上3つの可能性のうち、a. はおそらく成り立たないと思われるが、b. と c. はいずれが正しいか、判断は難しい。しかし、上の例のように、-ls と -l のように2種類の形があり、s の出没が統語的条件などではなく、単に後続する語の音韻的条件によって決まっているらしい(ただし、絶対的な条件ではなく、傾向程度のものである)ことからすると、化石的なものの残存と見る方がよいのかもしれない。

さて、ここで郷歌の「尸」も念頭において、歴史的に考察してみることにしよう。すでに多くの研究者が、「尸」の上古音と結び付けることによってこの問題を捉えようとしており(例えば Hashimoto and Yu (1973))、そのこと自体の当否は筆者には判断できないが、\*-ls という形は、この辺りの議論に関係する可能性はある。いずれにせよ、中期語の -lq は中期語において、当時の発音に極めて忠実に表記されており<sup>10</sup>、かつ、現代語にも知られている限りすべての方言にその反映が見られるということ、また、q という要素は、それ以外では、属格の s のある特殊な環境における異形態を除くと、中期語の音韻体系の中でまったく必要のないものであるということからすると、他の子音の名残りであると考えerことは不当ではないと思う。

なお、郷歌の中には、若干ではあるが、体言のあとに「尸」を用いる場合がある。例えば、「道尸」MK kilh、「秋察尸」MK kozolh などであるが、場合によっては、ls のみならず lh をも表わしたものであるか、または、これらの体言に属格の s が付いたものを表わしたか(その場合、必ず h が脱落した形に s が付く)、または、そもそも中期語の体言形態素末の h の由来が多様であった、など、さまざまな考慮の余地がある。

<sup>10</sup>このあたりの詳細は福井玲(1993)参照。

#### 4.2.4 「遣」

未詳。この字を kwo の音に引き当てるのは、後世の吏読解説書に基づく。それより古い時代にもこれがあてはまるのかどうかは定かでない。また、音であるか訓であるかも定かではない。この由来については、梁柱東(1965)、兪昌均(1994)に詳細な議論が見られ、いずれも興味深いものではあるが、何人も説得させられるものともまではいかないように思われる。

郷歌に見られるこの字の用例は「古」の場合と若干異なる。まず、「古」は接続語尾の場合と、疑問詞疑問文の語尾の場合とがあるが、「遣」は後者の例は少ない(もっともその可能性の高い例としては、金完鎭(1980)の解説によると、願往生歌の「西方念丁去賜理遣」の「遣」を、その前の行の「伊底亦」を estyeyyek 「どうして」という疑問詞に対応する語尾とする例があるが)。また、例えば、「白遣賜立」などの「遣」の用法は「古」には見られない。このような用法の違いをもとにして、今後、文法的機能も語形も「古」とは異なっていたものを再構しうる余地があるのではなからうか。

## 5 新羅語の音韻

これまで述べたことから想像されるように、新羅語の音韻体系については、その全貌を明らかにするのは困難である。しかし、郷歌の用例を詳しく調べると、中期語における特異な音素であった3つの有声摩擦音/ $\gamma$ , z,  $\beta$ / (これらを以下では ' , z, v で転写する)についてはかなりのことがわかる。まず、中期語において  $\gamma$  が見られる語形に対応する郷歌の例は次のようである。

- (5) 何如 為理古 (処容歌)  
 este holikwo  
 「どうしようか?」

この例の「為理古」の部分、金完鎭(1980)では、holiskwo と解説しているが、もしそうであれば当然「為理叱古」とでも表記されたはずであり、これは holikwo と読むのが正しいと考える(李基文(1998:98)も明確にこのことを指摘している)。この holikwo に該当する中期語の形は、holi'wo (' が  $\gamma$  を表わす)で、これは、他の環境における kwo の頭子音が弱化した形である。郷歌の「為理古」は、そのような弱化がまだ起きていなかったことを示している。これと似た例として、「阿孩古」(「子であり」MK ahoy'wo)、「知古如」(\*alkwota; 使役形 対応する MK なし)、「知遣」(「知って」MK al'wo(?))などがある。一方、弱化が起っていたかもしれないと考えられる例もある。「沙矣」(怨歌 MK mwol'ay)であるが、ただしこの部分の解説は疑問の余地があり<sup>11</sup>、保留しておき

<sup>11</sup>例えば、兪昌均(1994:806)は「沙矣」の「矣」の部分をも MK mwol'ay の語形の一部と見るのではなく、處格助詞としている。また、周知のように多くの方言において、[molge]のように

たい。

次にzについては、sと読まれてもおかしくない表記のものが多く、また、vについてもpと読まれておかしくない字で表記されている。もちろん、これは、z, vを表わすのに適当な字音になったため、という可能性もありうるが、γの場合も含め、むしろ郷歌においてはこれら3つの有声摩擦音は存在しなかったとする考え方も成り立ちうる。そうであれば、それはそれでまた別の問題が生じるのであるが、例えば、Martin (1996)の「弱化説 (lenition hypothesis)」のように、何らかの方策は考えられるであろう。

## 6 新羅漢字音

河野六郎 (1979:318) でも断片的に触れられており、また Hashimoto and Yu (1973), Hashimoto (1977:483) などでも述べているように、新羅の漢字音と、その後の朝鮮漢字音にはかなりの違いが見られる。Hashimoto and Yu (1973), Hashimoto (1977) では、郷歌の「只」が\*kiという字音に基づくことや、前節で述べた「尸」の音について、これらが中古漢語よりも古い段階を反映しているとしている。その他、体系的に見られる相違として次のようなものがある。

まず、これはよく知られている事実であるが、止撰開口で歯頭音と正歯音二等の頭子音をもつ韻母は中期朝鮮語の漢字音では・[Λ]で現われるが、郷歌においては[i]のような母音を表わしていた。この点に関する郷歌の用例はほとんど例外がない。

(6) a. 「史」(MK so) — 兒史(「顔が」MK :cuz-i)

b. 「次」(MK cho) — 枝次(「枝」MK kaci)

c. 「賜」(MK so) — 為賜尸知(「なさるか」MK hosilqti) 等々 多数。

なお、李基文(1998:85)は、「枝次」の表記は、kacのような音節末破擦音を表わしていたとしている。もしそうであったとすれば、ここでの例としてあげられるものが減ることにはなるが、反例になるわけではない。

次に、阻害音の有気/無気に関しても後の朝鮮漢字音とは違いのあったことが窺われる。例えば:

(7) a. 枝次(「枝」MK kaci) — 讚耆婆郎歌、蓬次(「蓬」MK tapwoc) — 慕竹旨郎歌

b. 惡寸(「悪い」MK mecun) — 懺悔業障歌

kが弱化していない形が残存することも当然考慮に入れるべきである。

これらの表記は *kaci*, *tapwoci*, *mecun* のような語形を表わしていたと考えられるが、これらの母音間の *-c-* は音声的には現代語のように有気音であったか、あるいは少なくとも有気音ではなかったと考えられる。それらに対して次清字である「次」「寸」を用いているということは、これらの字音が、中期語の場合のような有気音 (MK *cho*, *chwon*) であったとは考えにくい。

唇音についても同様のことがいえる。音読されたと考えられる部分を含む例としては次のようなものがある。

- (8) a. 衣波 (「着て」 MK *nipe*) — 広修供養歌、迷波 (「迷って」 MK *ive*) — 懺悔業障歌、伊波 (「豊んで」 MK *tyepe*) — 普皆迴向歌、總結無盡歌
- b. 必于 (「雖」 MK *pilok*) — 請佛住世歌

これらの表記は *nipa*, *iva(?)*, *tyepa*, *pilok* のような語形を表わしていたと考えられるが、ここでも、これらに含まれる母音間の *-p-*, *-v-*, さらに語頭の *p-* が有気音であったとは考えられないことから、「波」「必」の字音は有気音 (MK *pha*, *phil*) であったは考えにくい。なお、この2つは中国語では全清であって、もともと朝鮮漢字音において有気音で現われるのが対応関係から言えば不規則なのであるが、いずれにしても中期朝鮮語の漢字音とは異なっていたことは確かであろう。

さらに、中期語の漢字音で、仏教関係のもののうち、有気/無気両方の字音をもつものがある (例えば、波、婆 MK *pha/pa*; cf. 伊藤智ゆき (2002))。これらのうち、今日までその代表的な字音として伝えられているのは有気音の方であるが、無気音の方は新羅時代に仏教用語として採り入れられたものの名残りかもしれない。さらに想像をたくましくするならば、こうした現象は日本で仏教関係の用語に呉音が多く用いられるのとある意味で並行的なのかもしれない。

なお、以上のような例は、断片的なように見えるかもしれないが、実際にはさほど多いとはいえない音読字についてほとんど例外なくいえることがらである。このことから推測すると、新羅の漢字音は今日我々の知っている朝鮮漢字音とはかなり違ったもので、もしかしたら日本の呉音と漢音ぐらい隔たっていたかもしれない (もちろん、このことは呉音が新羅の漢字音と直接関係がある、という意味ではない。なお、呉音と朝鮮半島の漢字音については河野六郎 (1978) がもっとも正鵠を射た論考である)。

最後に蛇足であるが、以上のような例を見てくると、郷歌に類出する「佛體」(「ほとけ」 MK *pwuthye*) の語形も見直す必要が出てくるかもしれない。中期朝鮮語に慣れた目でみると、「體」(MK *theye*) の字音と、*pwuthye* の語形はうまく合うので、郷歌の「佛體」という表記が *pwuthye* のような語形を表わしていたと考えやすいが、あるいは実際には *pwutye* だったのかもしれない。

## 参考文献

- 鮎貝房之進 (1955, 1956) 「借字攷(一)~(三)」『朝鮮学報』7, 8, 9.
- 伊藤智ゆき (2002) 『朝鮮漢字音研究』未公刊博士論文, 東京大学大学院人文社会系研究科.
- 小倉進平 (1929) 『郷歌及び吏読の研究』京城帝国大学法文学部紀要第一.
- 金完鎮 (1980) 『郷歌解読法研究』韓国文化研究叢書 21 ソウル大学校出版部.
- (1985) 「特異な音読字および訓読字についての研究」『東洋学』15: 1-17. 檀国大学校 東洋学研究所.
- (2000) 『郷歌と高麗歌謡』ソウル大学校出版部.
- 河野六郎 (1964-1967/1979) 「朝鮮漢字音の研究」『朝鮮学報』31-33, 35, 41-44. (『河野六郎著作集 2』(1979) 東京: 平凡社 所収)
- (1978/1980) 「朝鮮漢字音と日本呉音」『末松保和博士古稀記念論集 —古代アジア史論集』上巻, 東京: 吉川弘文館. (『河野六郎著作集 3』(1980) 東京: 平凡社 所収)
- (1987) 「百濟語の二重言語性」『中吉先生喜寿記念 朝鮮の古文化論讃』81-94. 東京: 国書刊行会.
- (1993) 『三国志に記された東アジアの言語および民族に関する基礎的研究』平成 2・3・4 年度科学研究費補助金 一般研究 (B) 研究成果報告書. 東洋文庫.
- 辻 星児 (2000) 「「二中歴」「世俗字類抄」所引の朝鮮語数詞について」『岡山大学言語学論叢』8: 1-18.
- 福井 玲 (1993) 「中期朝鮮語の複子音と濃音について」『外国語科研究紀要』東京大学教養学部外国語科 41-5: 113-139.
- (2000) 「朝鮮語の歴史的研究における二つの話題」『月刊 言語』29-6: 104-111, 東京: 大修館書店.
- (2003) 「朝鮮語音韻史の諸問題」『音声研究』7-1: 23-34.
- 兪昌均 (1956) 「郷歌に現われた“尸”の文法的機能と音価」『国語国文学』15, ソウル: 国語国文学会.
- (1994) 『郷歌批解』ソウル: 蜩雪出版社.
- 梁柱東 (1965) 『増訂 古歌研究』ソウル: 一潮閣. (『朝鮮古歌研究』(1942) の増訂版)
- 李基文 (1995) 「『三国史記』に見える地名の解釈」『朝鮮文化研究』2: 1-12. 東京大学文学部朝鮮文化研究室.
- (1998) 『新訂版 国語史概説』ソウル: 太学社.
- Hashimoto, Mantaro J. (1977) Current developments in Sino-Korean studies. *Journal of Chinese Linguistics*, 5: 103-125.

- and Yu, Chang-kyun (1973) Archaism in the *hyang-tshal* transcription. *Journal of Asian and African Studies*, 6: 1–21. Tokyo: ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies.
- Martin, Samuel E. (1996) *Consonant lenition in Korean and the Macro- Altaic question*. Center for Korean studies monograph 19. University of Hawai'i Press.
- Ramsey, S. Robert (1986) The inflecting stems of proto-Korean. *Language Research* 22-2: 183–194. Seoul National University.
- (1991) Proto-Korean and the origin of Korean accent. In: Boltz, W. G. and Shapiro, M. C. (eds.) *Studies in the historical phonology of Asian languages*, 215–238. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- (1997) The invention of the alphabet and the history of the Korean language. In: Kim-Renaud, Y.-K. (ed.) *The Korean Alphabet: It's history and structure*, 131–143. University of Hawai'i Press.
- Vovin, Alexander (1995) Once again on the accusative marker in Old Korean. *Diachronica* XII:2, 223–236.
- (1999) Once again on the reading of the Old Korean 尸. In: Embleton, S. et al. (eds.) *The emergence of the modern language sciences: Studies on the transition from historical-comparative to structural linguistics in honour of E. F. K. Koerner*, vol. 2, 289–300.

# Some Remarks on Old Korean

FUKUI Rei

University of Tokyo

**Key words:** Old Korean, Middle Korean, Hynagka, Sino-Korean

In this paper, I will discuss various topics concerning the historical study of Old Korean.

First, I will present a brief account of the languages spoken in the Korean peninsula in the period of the Three Kingdoms.

Next, I will discuss problems found in the reconstruction of Old Korean. I will focus on the decipherment of the following phonograms: 叱, 乙, 勝, 尸, and 遣. Among these, I will present a new theory on the reading of 尸, by showing the possible origin of the Middle Korean prospective modifier *-lq*. The nominal usage of this morpheme shows a peculiar form *-ls*, which is different from normal usages, and can be considered as a fossilized form.

Then, I will argue that the Old Korean counterparts of Middle Korean voiced fricatives may have been plain plosives.

Finally, I will argue that the system of Sino-Korean in Silla was quite different from that of Middle Korean. Such claims have already been made by several scholars but I will show that the difference was so great that the relationship of the two systems can be comparable to the difference of the two systems of Sino-Japanese, known as Go-on and Kan-on.